

今年度のしがきんホール・コンサートシリーズを締めくくるのは

関西実力派奏者による珠玉のピアノ・トリオ!!

モーツァルト ピアノ三重奏曲 第7番 ト長調

プログラムにモーツァルトを組んだのは、お客さまが親しみやすいという面からですが、後半に演奏するラヴェルが何より一番愛した作曲家でもあるからです。モーツァルト特有の透明感や純真さはラヴェルにも通ずるところを感じます。この第7番は、第2楽章にバリエーション(変奏)が取り入れられていて、凝った手法で書かれています。モーツァルトの作品の中でも大人の雰囲気や気品があり、一筋縄ではいかない難しさも感じますが、それでいて軽やかで明るい音色はモーツァルト特有の透明感があり、明るく弾けるような第3楽章は私が一番好きな楽章です。

フォーレ(没後100年記念) ピアノ三重奏曲 二短調

ラヴェルのトリオが、たくさん音を組み合わせて宇宙のように広がる、響きがまるで音のマジックのようなものに対して、フォーレのトリオは、極力音を少なくシンプルであるところに、ラヴェルとフォーレの違いを感じています。とはいえ、不協和音を効果的にたくさん使っている共通点も見い出せます。執拗に繰り返される強引とも言える転調は、まるで脳内が歪んでくるような、何とも言えない緊張感の連続で、奏者は一瞬たりとも気が抜けません。全体の印象としては、フォーレ特有のどこか陰鬱な雰囲気がありますが、洗練された気品あるフランス人の粋なセンスも感じおこさせます。フォーレにしかない魅力がふんだんに詰まった素晴らしい作品で、その世界観を味わっていただけたらとても嬉しいですよ。

ラヴェル ピアノ三重奏曲 イ短調

この曲はとにかく音のマジックです。不協和音をこれでもかというほど多用して、音数が多いのですが、不思議とその響きには、どこまでも透明感があります。そして、宇宙のように音の響きが空間いっぱいになり、そのスケールの大きさにただただ魅了されてしまいました。何と言っても、技術的な難しさでは群を抜いて難しく、名曲にもかかわらず、生で演奏されることはなかなかない曲だと思います。ですが、練習していると、ラヴェルのマジックに包まれて、とにかく楽しい。気持ちが高揚します。また、ラヴェルの母親の故郷であるバスク



ピアニスト
北川恵美

地方の民族的なハーモニイリズムもこの作品の聴きどころと言えるでしょう。第一次世界大戦が勃発した年に書かれた作品で、ラヴェルは無我夢中で書き上げるとすぐに軍隊に志願するのです。

共演のお二人(ヴァイオリン赤松由夏さん、チェロ池村佳子さん)について

赤松由夏さんは同じ歳で同級生ということもあり、仲良くさせていただいています。とにかく、誰に対しても気さくで、また気配りのできるその人柄は、みんなから愛される売れっ子。仕事もとにかく忙しい人だと思いますが、赤松さんのリーダーシップを尊敬しています。池村佳子さんとは10年以上前にも一緒に練習させていただいたことがありますが、久しぶりの共演で、楽しくやらせていただいています。食欲にコンサート活動をされる様子には、ただただ脱帽しています。ますますのご活躍が楽しみなチェリストです。

滋賀のお客さまに一言お願いします。

今回、ピアノ・トリオでのコンサートの機会を得て、とても喜んでいきます。日頃、ピアノは孤独な世界です。昔、恩師から、オーケストラは大宇宙、ピアノは小宇宙、という言葉を受けました。そう、ピアノは一人でも成り立ってしまう世界なのです。でも、一人で作る世界より、仲間と共に造り上げる世界はもっと楽しい。さしずめ、室内楽は中宇宙でしょうか？方法は違えども、造り上げることには変わりありません。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、3人で造り上げる宇宙を、どうか聴きにいらしてください。空間いっぱい広がる世界を皆さまと共有できましたら、これ以上ない幸せです。

◎北川恵美(ピアノ) 滋賀県竜王町出身。東京藝術大学卒業。ドイツ国立フライブルク音楽大学大学院首席最優秀修了。リサイタルなどソロ活動の他、トリオ・ジパングやカメラーデントリオなどアンサンブル活動も精力的に行う。これまでにソリストとして関西フィル、東京藝大オーケストラ、オペラハウス管弦楽団等と協演。